

大正 14 年貴族院多額納税者議員選挙 —埼玉県の場合—

西尾 林太郎

埼玉県における大正 14〔1925〕年実施の貴族院多額納税者議員選挙において、政友会側では前回の選挙に引き続き県政界の実力者田島竹之助によって候補者が擁立された。前回の大正 7〔1918〕年の選挙では 15 人というごく限られた有権者であったため、田島の指名と根回しによる擁立が可能であった。これに対し、7 年後の大正 14 年には、貴族院改革により有権者数が 200 名に激増した状況を踏まえ、田島は地元北埼玉郡の政友会「支部」を始とする政友会系政治団体の支持を獲得しつつ、候補者を埼玉県政友会支部推薦候補者とすることによって自ら推薦する候補者擁立を可能とした。反対党の憲政会も同じような党内手続きを踏みつつ現職の多額納税者議員を再出馬させたのである。埼玉県選挙区の定数は 2 で、政友会と憲政会の候補者が共に、次点を大きく引離して当選した。こうして、埼玉県の場合、貴族院多額納税者議員選挙は完全に政党化したのである。

はじめに

第 50 議会(大正 14〔1925〕. 12.26~3.30)において、衆議院議員選挙法が改正され普通選挙法が成立したが、それに数日先んじて貴族院令が改正された。それは、有爵(華族)議員に対し勅選議員や多額納税者議員などによる勅任議員の数の上での優位性を確立し、多額納税者議員の増員やその有権者数を 6.7 倍ないしは 13.3 倍に増加させるものであった¹⁾。

後者について言えば、各府県から選出される任期 7 年の多額納税者議員は定数を 47 から 66 に拡大し、選挙区は各道府県で定員は 1 名または 2 名とし、有権者は各選挙区一律 15 名から 100 名または 200 名に増員されたのである。ここに①定数 1—有権者 100、②定数 2—有権者 200 の区別は選挙区である各道府県の人口の寡多によった。すなわち、47 道府県について平均人口以上の人口を有する北海道、東京、京都、大阪の各府、新潟、福島、茨城、埼玉、千葉、神奈川、長野、静岡、愛知、兵庫、岡山、広島、福岡、熊本、鹿児島各県は②、それ以外の各県は①である。互選の方法は貴族院多額納税者議員互選規則(大正 14 年勅令 234 号)によったが、新たに衆議院議員選挙法中罰則規定が準用されることになった(大正 14 年 5 月 5 日法律第 48 号)。

では、こうした新制度の下で選挙はどのように行われたか。管見によれば、この観点からの多額納税者議員選挙に関する研究は兵庫県事例のみである²⁾。しかし、それは 15 名から 200 名へと増加した有権者の特徴を詳細に分析したものではあるが、選挙過程で彼らがどのように活動したかについて、明らかにするものではない。すなわち従来と比べ 13 倍余に激増した有権者が 2 名の当選者を選出一互選一する過程が明らかではないのである。

本稿は埼玉県を例にとり、その選出一互選過程を明らかにすることを目的としている。埼玉

県を事例として選んだのは、第2次加藤高明内閣与党の憲政会である埼玉県支部が作成したこの選挙の有権者の名簿を筆者が入手したことによる。大正期には多額納税者議員選挙に政党が少なからず関与していたことは明らかであり、政党は衆議院と対等な権限を持つ貴族院を政党本位に動かすため同院に政党の力を扶植しようとしたことは、蓋し必然であった。「埼玉県貴族院議員多額納税選挙人名簿」と題するこの小冊子(写真1)をもとに、憲政会埼玉県支部が憲政会員や憲政会支持者を貴族院に送り込むべく選挙活動を展開したに違いない³⁾。

さて、その選挙人名簿であるが、縦13センチ、横9.5センチで、29ページからなる活版刷りの小冊子である。後掲の図1のように、当時埼玉県は北足立郡をはじめ9郡から成ったが、憲政会埼玉県支部によって200名の有権者が9つの郡別に整理されている(写真2)。ちなみに互選人名簿は大正14年6月1日現在で埼玉県庁により調整され、7月20日に公示された。この互選人名簿は直接税の納税額の多い順に氏名と税額を記載したものであったが、それに基づき憲政会埼玉県支部が選挙対策用に200名の互選人を9郡別に整理排列し、この冊子を作成したと思われる。なお、埼玉県の互選人名簿は貴族院多額納税者議員互選規則第5条の規定により、7月20日から15日間、即ち8月3日まで埼玉県庁で縦覧に供された。

なお、本論文の末尾に「埼玉県貴族院多額納税者議員互選人名簿」①～④を付した。これは憲政会作成のものに県下の直接国税納税額の順位、生年月日、年齢、職業を入れたものである。これらのデータは、織田正誠編『貴族院多額納税者名鑑：大正14年6月1日現在』(1926〔大正15〕年、太洋堂出版部刊)によった。

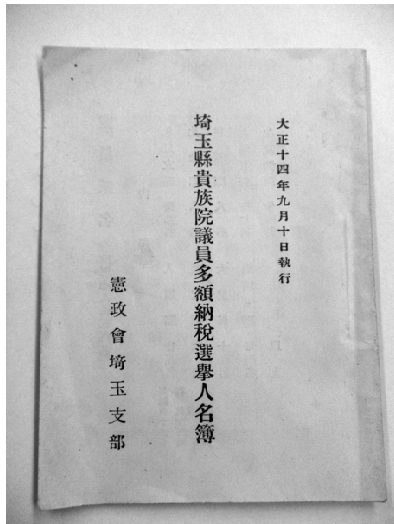


写真1 「選挙人名簿」

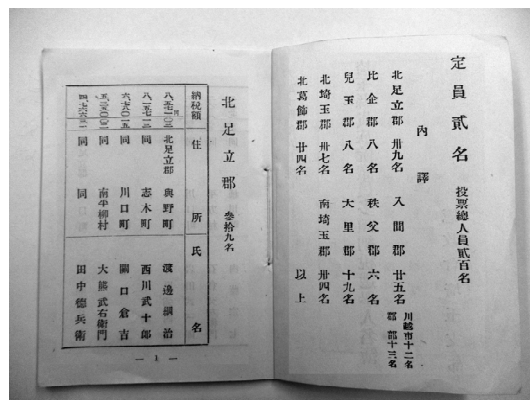


写真2 「選挙人名簿」の一部

以下、本論文において、この「選挙人名簿」に掲載されている人物については、名簿参照の便宜のため、この「名簿」における選挙人の通し番号を括弧に入れその人物の後に付した。

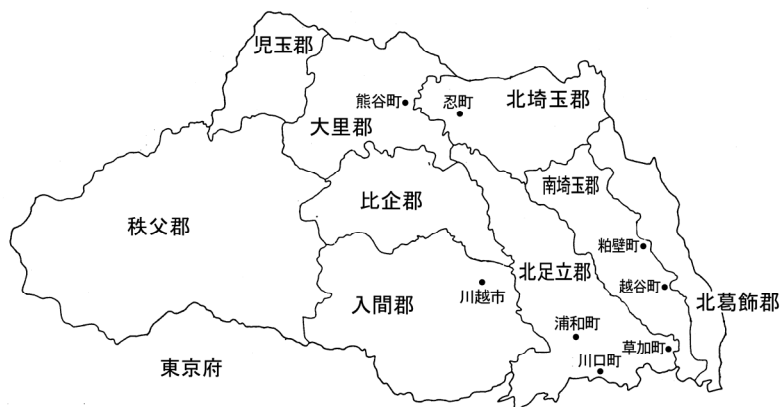


図 1 埼玉県郡編成図

1. 候補者擁立

新聞で見る限り、埼玉県において多額納税者議員選挙の候補者選出をめぐり具体的な動きが出てきたのは、互選人名簿が公開されて 10 日たった 8 月早々のことである。

北葛飾郡吉田村の金沢理三郎 (177) は、先月より「暗中飛躍」を開始し、親族会議を開いた結果立候補を見合せていたが、8 月 1 日に至り、東京日本橋区の柳橋の料亭「柳光亭」に南埼玉、北葛飾、北埼玉 3 郡の有権者を集め、自ら立候補について秘密裏に打診した⁴⁾。彼は 139 町歩を有する県内有数の大地主のひとりで、直接税 5595 円を納める県内 15 番目、地元の北葛飾郡では 2 番目の多額納税者である⁵⁾。この日の会合の参会者の人数は明らかではないが、金沢の地元の北葛飾、その左隣の南埼玉、左上隣の北埼玉という、埼玉県の茨城県寄り 3 郡の一部有権者が参集した。

一方、同じく 1 日、憲政会埼玉支部は浦和町の武蔵会館に午後 1 時より 3 時半にかけて、多額納税者議員候補者薦銓衡会を開き、現職の斎藤善八 (145) 再出馬に向けて、本人の意向を確認することが決められた⁶⁾。

これに対し北埼玉郡の政友会員グループは、3 日午後 1 時に北埼玉郡忍(おし)町公会堂に会合し、隣接し「もともと交渉のあった」⁷⁾大里郡中瀬村の元代議士斎藤安雄 (101) を推薦する方向で話がまとまり、5 日に再度忍町公会堂で有権者全部を集めて協議して、その賛否を決することとした。埼玉県では明治 10 年代後半に、自由一改進黨の勢力は改進黨が優位であったが、地域性すなわち郡による違いが大きかった。川越、鴻巣、浦和、草加など東京寄りの都市部は改進黨の支持者が多かった半面、北埼玉、大里、秩父方面では自由党系勢力が強かった⁸⁾。明治 23 [1890] 年、その年の帝国議会開設を直前に中央の自由党再興派と呼応する勢力と板垣退助の愛国公党支持派とに分裂したが、北埼玉、大里の自由党勢力は後者に接近し政治結社「北武俱樂部」を結成した⁹⁾。その後、中央における旧自由党勢力の再統合により、この結社の政治的な存在意義は半減したのかもしれないが、後年まで両郡の自由党員の交流を可能にしたように思われる。また、この頃より県内における自由党の勢力が改進黨のそれを上回るようになった¹⁰⁾。

ところで、新聞¹¹⁾は、3日、忍町公会堂に集まった人々は次のとおりと報ずる。

前長者議員 田島竹之助、出井(兵吉)県会議長 増田(一郎)、門井(東一、田島竹之助の次女と結婚)、堀江(忠四郎)、高沢(俊徳)各県議、竹内忍同志会幹事 松岡(三五郎)忍銀行頭取以下有力者 10 余名

「前長者議員 田島竹之助」とは前多額納税者議員で、北埼玉郡では 2 番目の多額納税者(納税額 5904 円)であり、2 期にわたって貴族院議員を務めた田島竹之助 (106) のことである。すなわち、彼は明治 37 [1904] 年の総改選で当選し、続く明治 44 [1911] 年の総改選で再選され、14 ヶ年に亘って貴族院議員の職にあった。大正 7 年の総改選にあたり、田島の 3 度目の出馬はなかったが、田島自身が自らの後継者を指名した。彼が「適任者」としたのは北葛飾郡の田中源太郎(現当主である 176 の父)であった。田中は北葛飾郡有数の大地主であり、同郡随一の多額納税者(酒造業を経営、県会議員)である。このあたりの事情について、『東京朝日』は次のように報ずる。「埼玉県の長者議員選挙につき曩に現議員田島竹之助氏は前後二回北葛飾郡幸松村田中源太郎氏(政友会)を憐憫して候補者たらしめんとせしに田中氏は競争を好まざるが故に進んで名乗りを揚げざるも同志多数の同情を辞せざるべしとの態度を示したるより事実上田中氏は憲政会[政友会の誤り一引用者]の候補者と目せられらるるに至れり」¹²⁾。

『東京朝日』によれば、田島は 2 度までも田中に対し出馬に向け説得を試みたようであるし、田中が断れないよう有権者に根回しをしたようでもある。しかし、田島が田中を貴族院議員の後継者と目した、その理由は不明である。

これに対し憲政会は南埼玉郡岩槻町の斎藤善八を立てた。斎藤は岩槻町において呉服「紙善」や岩槻電気株を経営する実業家でもあった。先の『東京朝日』によれば、斎藤も「大勢より勝算確かならず自重して立たず」¹³⁾の姿勢であった。要は担がれた田中と出たいが勝算なく「自重」する斎藤との対決であった。いわば、低調な選挙戦であった。しかし、その戦いも田島らの画策により、双方の面子を立てつつ早々と終了した。当時の埼玉県知事西村保吉は後任の埼玉県知事堀内秀太郎への引継演述書において、この経緯について以下のように述べている。

客年六月第 5 期貴族院議員選挙には、政友会は田中源太郎を推し、憲政会は斎藤善八を擁立し、競争中多額納税者田島竹之助、上雄之助、榎本善兵衛其他の有力者の仲裁する処となり、本期中前四カ年を田中の任期とし、後三カ年を斎藤の任期と為すこととし円満に妥協成立し田中の当選を見たり¹⁴⁾

北埼玉郡の現職貴族院議員である田島と同じく北埼玉郡の上雄之助 (109) そして南埼玉郡の榎本善兵衛 (146) らが田中と斎藤の対決に割って入った、という程のことではないようである。任期 7 年の前半 4 カ年を田中が、後半 3 カ年を斎藤がそれぞれ多額納税者議員を務めることで双方の同意を取り付け、選挙戦を事実上終わらせたのである。この申し合わせによって田中は就任後 4 年で貴族院議員を辞し、大正 11 年 6 月に議席を斎藤に譲っている。田中—斎藤と自らの後任を決めたひとりである田島が、いま貴族院多額納税者議員総改選にあたり、隣接する大里郡の斎藤安雄を候補者として担ぎ出そうとしていた。今度は自らの地元北埼玉郡の政友会員を動かすという、手段をとることによってである。

さて、この田島は政社「忍同志会」の主催者であり、リーダーであった。明治 23 (1890) 年の第 1 回衆議院総選挙を契機に吏党系の政社として旧忍藩士らを中心に「忍同志会」は誕生

したが、それは大地主田島を中心に埼玉県唯一の吏党系団体として、明治期を通じて活動を続けた¹⁵⁾。明治から大正期にかけて衆議院議員選挙は小選挙区時代と大選挙区時代があったが、小選挙区では北埼玉郡と大里郡は第 4 区であった。この選挙区は他の選挙区と異なり、自由党系と改進黨系とが競合するのではなく、自由党系と吏党系とが競合したのである。すなわち、忍同志会は国民協会所属候補の小沢愛次郎らを支持し、当選させてきた。

しかし、忍同志会は政友会成立後、徐々に政友会に接近し、第 15 回県議員選挙が行われた明治 40 [1907] 年には、彼らは「完全な政友会員」となっていた¹⁶⁾という。第 7 回衆議院議員総選挙(明治 35 [1902]. 8、10 実施)まで忍同志会を率いて小選挙区で自由党と対決してきた田島は、大選挙区制が採用された明治 36 年 3 月の第 8 回総選挙以降、埼玉全県区という大選挙区制の下で自由党—政友会と競合しつつも対決することはなくなった。しかし、田島はその後も埼玉県政界に隠然とした力を持ち続けた。

すなわち、彼は田島一族のひとりで忍同志会員でもあった田島春之助を通じて埼玉県会にも影響力を持ち続けた。明治 43 [1910] 年 1 月、前年来の秩父—大宮新道の開削問題をめぐり内訌が高じて埼玉県政友会は分裂し、田島春之助ほか 4 名は政友会を脱党し、反対党である憲政本党と合流して埼玉倶楽部を結成するに至った¹⁷⁾。貴族院議員田島竹之助もこれに同調した。忍同志会のリーダーでもある彼は、むしろこの策謀の中心にいたとも考えられる。こうした田島らの行動で長らく埼玉県会を牛耳った自由党—政友会は一時的にせよ、県会において少数派への転落を余儀なくされた。

ところで、今回田島に担がれた斎藤安雄とはどのような人物であろうか。彼が県会議員から衆議院議員に転じた明治 31 [1898] 年 3 月の第 5 回総選挙、つづく同年 8 月の第 6 回臨時総選挙では、自由党および憲政党候補者として斎藤安雄は忍同志会そして同会に加え改進黨・進歩党系の憲政本党とも激しく戦った(第 6 回)。その後斎藤は一時県政界から退き、埼玉農工銀行や武州銀行の各取締役、深谷商業銀行、埼玉電灯会社の各監査役など県内の有力企業の重役を務め、埼玉県財界に大きな足跡を残した¹⁸⁾。しかしその後、明治 45 [1912] 年の第 11 回、大正 4 [1915] 年の第 12 回、大正 6 [1917] 年の第 13 回の衆議院総選挙に出馬してそれぞれ当選した。代議士になっても高遠な理想を訴えるのではなく、蚕糸業の保護救済、治水政策の確立など身辺にある産業上の問題を訴えた。しかしそれでいて、選挙民の動向におもねるところが無かったといわれる¹⁹⁾。そうした、斎藤の政治姿勢が、彼と政友会と一体化した忍同志会の指導者である田島との距離を縮めたのかもしれない。因みに、斎藤が衆議院議員として再び中央政界に返り咲いた第 11 回総選挙では、彼の地盤は大里、児玉両郡であった²⁰⁾。既にふれたように、その後彼は当選を重ねるが、大里郡を主たる地盤とする限り、忍同志会の間接・直接を問わずその支持を必要としたであろう。斎藤自身、田島に接近し、彼とのパイプ形成に努めて来たのかも知れない。何れにせよ田島が斎藤を担ごうとした理由は判然としないが、ふたりは政治的に近い所に居たように思われる。なお、斎藤は大正 14 年度の直接国税納税額 1105 円で大里郡では、19 人中 16 位、県下では 200 名中 161 位であった。

さて北埼玉郡多額納税者議員選挙の有権者大会は予定通り 8 月 5 日午後 1 時から忍町公会堂で開催され、田島竹之助や松岡三五郎 (110) 忍銀行頭取以下有権者 40 余名が出席し、斎藤安雄と同じく大里郡出身の長谷川宗治 (大里郡御正村在住、元県会議長) 前代議士も加わり、全

会一致で以て斎藤安雄を推薦する旨を決定した²¹⁾。これを受け翌6日午前10時から午後5時にかけて、大里郡政友会の同郡多額納税者議員候補者薦銓衡会が熊谷町の田島旅館で開催された。長谷川宗治より前日の北埼玉郡多額納税者議員選挙の有権者大会の様子が報告され、立候補に向けて斎藤自身の「快諾」を得ることができたので、近々大里政友倶楽部総会を兼ね同郡の有権者大会を熊谷に開きその承認を求めるとともに、政友会埼玉支部に公認を要請することとなった²²⁾。

これを受け、10日午後1時、政友会埼玉支部は浦和町伊勢弥治旅館に支部総会に代る評議員会を開き、大里郡および北埼玉郡政友会が公認を求めて来た斎藤安雄についての審議と候補者を一人に絞るかどうかについて検討することになった。この時、県内には北足立郡南平柳村で味噌醸造業を営み、関東一円に製品の販路を拡大した田中徳兵衛(5、南平柳村長)を推す動きがあった。田中自身も同じ北足立郡の蕨町商工会長を務めた橋本喜平(後県会議員)を介し、再三政友会埼玉支部に候補者としての公認を求めたのである。しかし、埼玉支部では両者の対立を收拾することができず、調停の場は東京に移された。すなわち8月12日、衆議院議長官舎に政友会所属の県選出の衆議院議員や主だった県会議員が集まり最終的な調整を模索した。埼玉第2区(入間郡)選出の衆議院議長粕谷義三が調停に乗り出したのである。彼は政友会埼玉県支部長でもあった。

その結果、政友会埼玉支部として2名当選を実現する自信は無く、党内分裂を回避するためにも、田中に立候補を断念させ、候補者を1本化することが望ましいとの結論に達し、同支部は田中に近い衆議院議員秦豊助(元内務官僚、秋田、徳島各県知事を歴任、第1次加藤高明内閣海軍政務次官)に辞退するよう説得を依頼した²³⁾。秦の選挙区は北足立郡を中心とする埼玉第1区であった。選挙の際、秦は北足立郡有数の実業家であり資産家の田中に負うところが大きかったであろうし、そのことが田中と秦を近づけたものと思われる。こうして政友会埼玉支部の候補者は一本化され、田中は辞退を余儀なくされた²⁴⁾。なお、このように多額納税者議員選挙の候補者選定について政党の指導者が大きな役割を果たすことは珍しいことではない。例えば、大正7〔1918〕年の選挙の際、原敬政友会総裁は福岡県の候補者1本化について、麻生太吉再選に向けて自ら「裁定を与え」たのである²⁵⁾。

さて、記述のように、7年前の選挙では、7年任期を4年・3年と二分し、前半を政友会推薦者、後半を憲政会推薦者というように、議員を交代することで対立を回避した。今回は定数が2であるからそれぞれの候補者を一人に絞ることで、前回同様両者の対立を避けたのである。

しかし、憲政会の陣営では候補者が絞りきれないようであった。8月8日現在で、現職の斎藤善八(南埼玉郡)、鈴木康太郎(38、親子二代の同志会・憲政会系県会議員、北足立郡)、田口菊太郎(県会議員、南埼玉郡)、田中四一郎(151、県会議員、南埼玉郡)の4名が候補者として取りざたされていた²⁶⁾。しかし、10日午前10時、浦和町の武蔵会館に埼玉県支部の多額納税者議員候補者薦銓衡会が開催され、結局斎藤善八に候補者が絞られた。

これに対し、政友本党は北足立郡の渡辺綱次(1)を擁立した。渡辺は製糸業を営む県下有数の実業家で直接国税納税額は県下第3位の実績を持つ。その中心にいたのが県会議員駒崎幸右衛門(北足立郡)である。駒崎は県内道路網の整備に尽力した人物として知られ、荒川の治水事業を推進した県会議員斎藤祐美と共に「陸の駒崎か水の斎藤か」²⁷⁾と称せられた。彼

は南埼玉郡出身の島田政談社長とともに越谷町の加賀屋旗亭に粕壁町の鹿間市兵衛を交え、越谷町とその周辺の有権者の幹部である山崎長右衛門（150、農業、直接国税納税額県下 88 位）らと数時間会談した²⁸⁾。他方、政友会系のなかでも、元貴族院議員故田中源太郎(大正 12. 1 死去)の嗣子田中源太郎(父と同姓同名)ら南埼玉郡や北葛飾郡の若手の中で埼玉県政友会支部が勝手に選んだ候補者を担ぎたくないとして「自由行動」を主張する人々もいた²⁹⁾。

ともあれ、この時点で候補者は以下の 3 名であった。

斎藤安雄	(政友会)
斎藤善八	(憲政会)
渡辺綱次	(中立、政友本党系)

2. 三派鼎立戦

このように埼玉県では三派鼎立戦となった。有力なのは護憲三派内閣の与党であった政友会と憲政会にそれぞれ公認されたふたりの斎藤であった。かれらは、それぞれ自身の地元選挙本部を構えた。

すなわち斎藤安雄は大里郡熊谷町の田島旅館を本部とし、ここに選対本部長とも言うべき忍銀行頭取松岡三五郎と衆議院議員松本真平（91、政友会）が詰め、深谷町の深谷銀行や忍町の忍商業銀行は斎藤安雄陣営の支部となった。そして秩父方面の応援と連絡は堤新六(秩父郡、県会議員)、柿原定吉(秩父郡、元大宮町助役、74)が、児玉方面のそれは公証人で元衆議院議員の持田直(児玉郡)、斉藤仙治郎(児玉郡、医師、前県会議員)がそれぞれ担当することとした³⁰⁾。なお、持田は剛直をもって知られ、自由党一政友会に所属したが、同志会に転じその後憲政会支部が埼玉県に設立されると、その相談役となっている³¹⁾

ところで、8 月 15 日、立候補予定者が埼玉県庁に召集された。今回の選挙の説明を受けるためである。9 時から上田荘太郎警察部長が浦和地裁の三吉検事正ともども選挙違反防止や選挙費用の協定、運動員の制限について総じて違反防止のための注意を促した³²⁾。こうして、事実上の選挙運動が開始されたのである。

しかし、8 月 17 日、政友本党に応援され、中立派と称された渡辺が本党支持による立候補断念を表明した。その事情は不明であるが、渡辺はその直前に、公認を条件に憲政会への入党希望を表明するにいった。しかし、これは憲政会の容れるところではなかった。立候補を公認した斎藤善八以外に鈴木康太郎らが公認候補として立候補を希望していたからである³³⁾。渡辺は既に各郡において選挙運動を展開し、その組織が出来上がりつつあった。本人の選挙からの撤退は迅速にできて、その組織そのものの選挙からの退去や組織そのものの解体は困難であろう。しかし、渡辺の辞退は、政友、憲政両党の協力や援助を得られないまま、立候補を表明できないでいた金沢にとって朗報であった。

20 日、金沢は東京で、渡辺擁立派の最高幹部でもあった駒崎幸右衛門県会議長、新井源次郎、島田民雄らと会合を持ち、続いて 21 日には島田が越谷、粕壁、松戸で南埼玉や北葛飾郡の少壮派や有権者の嫡子からなるグループの指導者たちと懇談するなど選挙運動を展開した。また、田中源太郎たちとも懇談している³⁴⁾。

粕壁や越谷を中心に南埼玉郡そして北葛飾郡の若手グループは、政友会にせよ憲政会にせよ

候補者擁立について事前の打診もないままそれぞれ県本部主導で候補者が選定されていったとして共に県本部に対し少なからず不満を抱いていたようであった。特に越谷町とその周辺では「有権者十人組」と称せられる大野伊右衛門 (157)、井出門平 (157)、小泉市右衛門 (154) 等を中心に金沢を擁立しようとする動きが出てきた³⁵⁾。彼等はそれぞれ材木商、農業、呉服商と職業はバラバラであるが、何れも30歳台と若手である。

8月23日午後1時、これらグループの幹部田中源太郎や新井信太郎ら4名の発起により粕壁町の寿司金楼において懇親会が開かれた。これは、かかる南埼玉郡や北葛飾郡における一部少壮派の動きを警戒した政友会埼玉支部の長老の一人飯野喜四郎(県会議員、南埼玉郡)の説得にもかかわらず開催された。飯野は大正9年に、南埼玉郡の政友会系の団体「越谷天領自治会」と同じく「南埼玉正交会」を合同して設立された庚申倶楽部を率いる南埼玉政友会の中心人物であった。発起人たちは帝国大学卒業者を含む少なくとも中学卒以上の学歴を有し、飯野による説得は無駄に終わったのである。

新聞の報ずるところによれば³⁶⁾、この日の懇談会への主な参加者は次の通りである。野村、斎藤、田村の三名はそれぞれ互選人の一族かも知れないが、少くとも互選人ではない。

南埼玉郡からの参加者が5人に止まったのは飯野による説得が効を奏したのかもしれない。

北葛飾郡 田中源太郎 (176)、新井信太郎 (178)、野村源之佐、

南埼玉郡 大里一太郎 (144)、大野伊右得門 (157)、日下部義人 (164)、斎藤健太郎、
田村章四郎

この8名が北葛飾郡出身の金沢を押し立てて「中立」と称し、本党の後援を受けることとなった。こうして、渡辺の立候補辞退により、一時混乱した埼玉県選挙であったが、結局、政友、憲政、本党の3党鼎立選挙の振り出しに戻った。

ところで、この金沢擁立は、「縁故関係をいもづるのやうにたどつて各方面にわたり氏を担ぎあげた政友派内の不満分子」³⁷⁾によるものと言われた。その中心人物で、「突然の豹変」と政友会系候補斎藤を嘆かせたのは元貴族院議員を父に持った田中源太郎である。田中にとって、その父は7年前に2度にわたり田島より立候補を打診され議員に当選したが、その7年後の今回の選挙で、すでに見てきたように、事前に斎藤擁立の可否についてなんらの相談も無く、大きな問題とならないままに政友会の候補者は斎藤安雄と決った。同様に前回候補者を出した北葛飾郡や隣接する南埼玉郡では、今回の選挙において事前に何らかの打診が無く、田島とその周辺すなわち北埼玉郡と大里郡主導で候補者が決定され、それを政友会埼玉県支部の決定として承認を迫られたことが問題なのであった。ともかく、田中らは斎藤候補や政友会埼玉県支部に反発し、金沢擁立に走ったのである。

こうして、3党鼎立戦の幕が切って落とされた。しかし、政友系の斎藤安雄と憲政系の斎藤善八の地盤は、それぞれ大里郡・北埼玉郡および南埼玉郡・北葛飾郡とほぼ固まっていた。これに対し中立＝本党系の金沢は「地元」北葛飾郡では憲政会が優勢であり、政友会埼玉支部の姿勢に反発して自らを担いだ田中らが頼りであった。金沢の陣営はこうして、川越市とそれが位置する入間郡や入間郡とその北の、斎藤安雄の本拠の大里郡との間に位置する比企郡を主戦場として戦った。ちなみに、9月3日付『東京日日』埼玉版は「川越を中心に三候補の大馬力

一入り乱れて物凄い活躍、市内十四票が何なるか」と、見出しを付けてその激戦ぶりを報じている。

入間郡は衆議院議長でもある粕谷義三の選挙区であり、政友会の強固な地盤であった。金沢陣営は政友会を飛び出した人々による政友本党の人脈を駆使して政友会の堅塁に臨もうとしたのかもしれない。しかし、入間郡の形勢について、政友会が優勢で、もし川越を含め憲政会側が有権者のほぼ半数である 12, 3 票を獲得できるなら大成功であり、金沢に至っては 3～5 票であろう、と斎藤安雄が半数を制するであろうとする消息通の言を報じている³⁸⁾。さらに同紙は「金沢氏やはり劣る」としながらも「金沢派の活躍は・・・目ざましいものがある」³⁹⁾と評している。

選挙戦そのものであるが、終盤戦についてみれば、代議士や県議を乗せた自動車の有権者家々を訪問し、投票を依頼して回るという形態であった。ちなみに、終盤になって比企郡では金沢派が「潜行」したため、選挙戦にはわかに活気づき、斎藤安雄は県議根岸憲助(大里郡、県会副議長)や松山町の支持者とともに選挙運動を展開した。根岸は県会議員となって日が浅かったが、大里・比企両郡にまたがる山地開墾事業に着手するなど将来が期待された政治家であった。これに対し、憲政会陣営は地元松山町在住の県議小林太郎(167)らが選挙運動を展開し、8日には代議士加藤政之助が憲政会埼玉支部より派遣され、郡内を「盛んに」自動車で廻った⁴⁰⁾。

以上のような選挙戦の様子をふまえて、『東京日日』は以下のように、郡別の各派の得票を予測している。予測困難については?で示した。予測合計欄における()内の数字は態度未定を含む予測困難の数である。

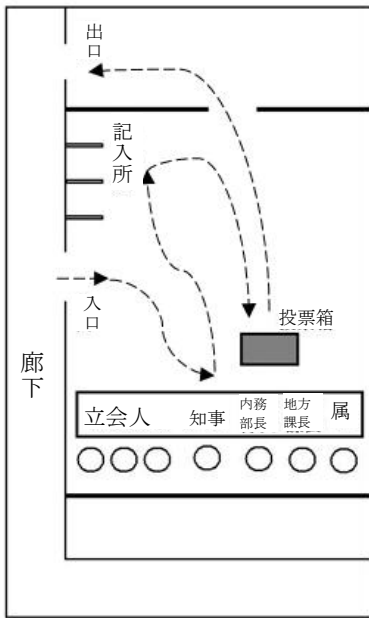
党派別得票予測

	有権者数	政友	憲政	中立	予測合計
北足立	37	10	20	7	37
入間・川越	25	?	?	0	0 (25)
比企	7	3	3	1	7
秩父	6	2	4	0	6
児玉	8	3	3	0	6 (2)
大里	18	13	3	?	16 (2)
北埼玉	36	25	4	4	33 (3)
南埼玉	34	10	10	14	34
北葛飾	24	5	10	?	15 (9)
合計	195	71	57	26	154(41)

出典：大正 14 年 9 月 10 日付『東京日日』埼玉版を基に筆者が作成

金沢は実際の投票で 39 票を獲得しているが、この予測では 26 票である。地元北葛飾郡で支持を延ばし、政友会の地盤である入間郡での「潜行」が功を奏したのであろうか。同様に憲政会の斎藤も入間郡の都市部川越あたりで支持票を集めたのであろうか、投票ではこの予想に 12 票上積みしている。

ところで「長者議員」選挙では斎藤らのように党公認ということはあるにせよ、衆議



第2図 選挙会場

院議員選挙とは異なり選挙費用の一部または大部分を公認する政党が拠出することはなかったと思われる。自前が原則である。その選挙費用について、金沢応援のため埼玉に来た政友本党のある幹部は「私の方(金沢派)などは、志の自動車があるのでですからね、両齋藤ほどはかかりませんよ、齋藤さんたちはどちらも六、七万円はかかったでせう」とし、さらに金沢派は訊ねられて「まあ、4万円ぐらいでせう」とこたえている⁴¹⁾。当時小学校教員の全国各府県平均給与は月額55円5銭で⁴²⁾、4万円という金額はこの小学校教員平均給与の約720倍、年棒にして60年分に相当する。そうであれば、当時の4万円は現在の価値にして2~3億円に相当するのではなからうか。3人の候補者とその陣営が200名の金持ちに対してどの様な金を使ったのであろうか。この点は不明である。

では、投票はどのように行われたのであろうか。

投票は9月10日午前9時から午後3時の間に実施され、その会場は県会議事堂事務室内に設営された。その配置は次の第2図のようである。知事を中心に入口手前に立会人3名、知事の向こうに内務部長ら県職員が着席した。多額納税者議員選挙の投票事務管理は地方長官によってなされ、各知事が選挙長であった。立会人は有権者中から3名が選出されることになっており、埼玉県では田中四一朗(153)、渡辺躰(184)、田島竹之助がこれにあたった。「雨にたたられた有権者は自動車腕車の列をつくつて続々とくりこみ、さすがに丸持長者の選挙だけに平民のそれとはちがつて豪勢なものであつた」⁴³⁾と、当日の様子を新聞は報じている。

そもそも今回の埼玉県選挙の有権者は、195名であった。4名の欠格者と1名の死亡者が出たためである。選挙規則によると、欠格者や死亡者が出た場合、名簿から削除はするが新たな補充はない。この4名の欠格者であるが、当該年度の納税額が各税務署管内において確定されるのがその年の8月1日で、それによる直接国税納税額県内ベスト200ないし100と、6月1日現在で府県が調整した選挙人名簿とは若干の齟齬が生ずる。そのため、この4名は8月1日現在で確定した納税額をもってしては埼玉県での直接国税納付額上位200には入れないで、欠格となったのである。

さて、埼玉県の場合この有権者のほぼ8割の159名が正午までに投票をすませた。9月11日付『東京日日』によれば3時に投票が締め切られ、30分の休息を経て、投票箱が議事堂に運ばれ、3名の立会人の立会の下で開票された。結局棄権者は14名で、投票総数は181である。その票の行方は次の通り⁴⁴⁾。

当選	齋藤安雄	政友会	72票
当選	齋藤善八	憲政会	70票
次点	金沢理三郎	中立一本党系	39票

両齋藤は次点金沢に大差をつけての当選であり、定数 2 をかつての護憲三派内閣の二大与党で議席を分け合うことになった。それにしてもこれら候補者への票はそれぞれどの地域から来たのか。その詳細は不明だが、投票前日における新聞による、各候補者についての郡別獲得票数予想(表 1)が、齋藤善八と金沢についてそれぞれ 13 票の違いこそあれ、ほぼこの結果と一致している。態度未決定を含む予測困難な有権者数は 41 であるが、当日の棄権者 14 を差し引くとそれは 27 となり、予測された得票数に上積みされたふたりの齋藤の分(政友・齋藤 1、憲政・齋藤 13)と金沢の分(中立 13)の合計 27 と一致する。それ故、各候補への各郡からの支持票はこの新聞予測に近いものであったかと考えてよからう。

むすび

埼玉県の場合、大正 7 (1918) 年および同 14 年の多額納税者議員選挙について、明治 37 (1904) 年から大正 7 年までの 14 年間にわたり貴族院議員を務めた田島竹之助の影響が大きかった。僅か 15 名の互選人一有権者の馴れ合いによる議員選出方式にピリオドが打たれた大正 14 年の選挙では、田島は自らの手足であった北埼玉郡の政友会勢力を動かし、政党活動の一環として貴族院多額納税者議員選挙を位置づけ、候補者を選出した。その過程で田島が適任者とした齋藤安雄の居住地大里郡の政友会組織が動き、齋藤を政友会埼玉支部推薦候補とした。ライバル候補も同様、ライバル政党憲政会の政党活動として候補者齋藤善八を選出した。有権者の飛躍的増大に加え、貴族院多額納税者議員選挙過程は候補者選出そのものが各郡特有な政治的行きがかりに少なからず左右されながらも、政党主導となった。その意味で選挙は「透明」となり、「民主化」されたのである。

また、有権者による互選とはいうものの、その選挙運動そのものに政党が深く関わった。およそ二院制の下での政党政治の主体である政党にとって、上院の構成とその動向は大きな関心事である。また各県別に 100 名ないしは 200 名の有権者を対象とする多額納税者議員選挙は各県別に支部や組織を有する有力政党にとって、各県別の地方組織を動員する好機でもあった。そのことがこの選挙に対する有力政党の関心をいやがおうにも高めたであろう。

因みに憲政会党務委員長であった齋藤隆夫(衆議院議員、兵庫第 15 区選出)は千葉県の選挙の動向に注目していた。千葉県は埼玉県以上に激戦で、前職の浜口儀兵衛(中立)に対し、憲政会公認の新人鶴沢宇八と同じく新人の菅沢重雄(中立)が 2 つ目の議席を激しく争った。齋藤は、9 月 7 日に千葉市内の鶴沢選挙事務所を訪ね「形勢を聴取」⁴⁵⁾した。投票日前日の 9 月 9 日、彼は日記に「多額議員選挙弥々明日に迫る」⁴⁶⁾と記し、投・開票当日(9 月 10 日)の午後党本部に詰め、「各地よりの報告を待つ」⁴⁷⁾た。かかる齋藤の行動もまた、与党であるなしを問わず有力政党が貴族院改革後の多額納税者議員選挙に対しいかに大きな関心を持っていたか、を物語っている。

多額納税者議員互選人名簿①

番号	<納税> 額順位	名前	生年月日	年齢	職業	住居	直接国税総額
北足立郡							
1		渡辺綱治	明治25年8月8日	33	製紙業	北足立郡与野町	8,571,030
2	6	西川武十郎	萬延元年7月7日	65	農業	北足立郡志木町	8,157,130
3	8	關口倉吉	明治3年7月15日	55	鑄物業	北足立郡川口町	6,780,150
4	13	大熊武右衛門	明治19年4月25日	39	味噌製造業	北足立郡南平柳村	5,350,020
5	15	田中徳兵衛	明治8年5月15日	50	味噌製造業	北足立郡南平柳村	4,766,310
6	18	永瀬庄吉	安政4年10月20日	68	鑄物業	北足立郡川口町	4,612,440
7	24	石田信之助	明治22年2月8日	36	煙草元賣捌業	北足立郡鳩ヶ谷町	3,679,720
8	37	増田金藏	明治15年11月1日	43	鑄物業	北足立郡川口町	2,973,130
9	38	保坂兼次郎	慶應3年9月24日	58	鑄物業	北足立郡川口町	2,927,160
10	42	井原彌四郎	安政3年9月14日	69	農業	北足立郡與野町	2,749,960
11	44	岩田武三郎	元治元年1月3日	61	農業	北足立郡川口町	2,734,450
12	45	石倉又左衛門	明治7年12月30日	51	醬油類製造業並穀類販賣業	北足立郡平方村	2,638,550
13	47	内藤宗七	文久3年12月3日	62	油砂糖販賣業	北足立郡桶川町	2,559,220
14	60	玉井利吉	明治12年6月21日	46	酒類製造業	北足立郡馬室村	2,101,840
15	75	矢崎健治	明治11年3月13日	47	鑄物業販賣業	北足立郡川口町	1,841,310
16	78	石川勝治	明治17年10月22日	41	味噌醬油製造業	北足立郡平方村	1,787,710
17	81	木村柳藏	明治16年2月19日	42	材木販賣業	北足立郡鴻巣町	1,731,370
18	83	田中育之	明治23年12月19日	35	農業	北足立郡小室村	1,704,830
19	87	永瀬寅吉	明治23年11月5日	35	鑄物業	北足立郡川口町	1,646,570
20	92	福島誠嘉	明治16年3月7日	42	農業	北足立郡田間宮村	1,607,740
21	93	永瀬長次郎	明治4年12月7日	54	金銭貸付業	北足立郡川口町	1,605,070
22	104	矢部俊治	明治17年3月7日	41	農業	北足立郡片柳村	1,522,390
23	108	田中榮三郎	明治6年2月3日	52	酒類商	北足立郡浦和町	1,481,130
24	122	岩瀬榮次郎	明治21年6月15日	37	牛豚肉商	北足立郡大宮町	1,369,450
25	134	栗原和助	明治6年11月26日	52	製綿業	北足立郡鴻巣町	1,268,020
26	141	濱野平次郎	明治元年2月7日	57	農業	北足立郡小針村	1,241,170
27	143	船津徳右エ門	文久2年2月2日	63	農業	北足立郡鳩ヶ谷町	1,221,840
28	154	細井善右エ門	文久3年12月20日	62	味噌製造業	北足立郡蕨町	1,167,680
29	167	吉岡兒次郎	明治9年7月13日	49	農業	北足立郡谷塚村	1,090,080
30	168	平岡賢三郎	明治12年12月11日	46	農業	北足立郡安行村	1,082,700
31	173	田沼房吉	明治9年7月15日	49	米穀商	北足立郡鴻巣町	1,057,960
32	179	濱田熊次郎	明治26年8月1日	32	荒物商	北足立郡川口町	1,026,350
33	181	飯野源藏	安政5年10月20日	67	醬油醸造業	北足立郡植水村	1,024,500
34	182	渡邊與吉	明治6年12月22日	52	材木商	北足立郡鴻巣町	1,023,460
35	183	須田卓二	明治13年10月5日	45	農業	北足立郡上平村	1,019,610
36	184	細井省三	明治13年5月13日	45	農業	北足立郡谷塚町	1,018,940
37	190	湯澤善次郎	安政3年9月6日	69	米穀商	北足立郡浦和町	1,006,440
38	191	鈴木康太郎	明治22年1月18日	36	農業	北足立郡尾間木村	999,890
39	199	松谷文治	明治2年10月2日	56	農業	北足立郡鴻巣町	970,220
川越市・入間郡							
40	4	渡邊吉右衛門	明治2年6月2日	56	呉服洋服洋物販賣業	川越市	8,241,730
41	56	伊藤長三郎	明治11年11月22日	47	砂糖肥料油販賣業	川越市	2,206,970
42	80	小山三省	明治22年6月27日	36	煙草販賣業	川越市	1,757,340
43	99	小島金兵衛	明治7年10月14日	51	米穀販賣業	川越市	1,580,240
44	109	竹内榮吉	明治14年8月6日	44	酒製造販賣業	川越市	1,480,140
45	115	林友平	明治13年2月1日	45	肥料販賣業	川越市	1,446,030
46	150	木下藤次郎	明治24年4月14日	34	酒類販賣業	川越市	1,193,640
47	153	水村益三	明治13年9月16日	45	米穀販賣業	川越市	1,169,860
48	156	山崎嘉七	明治2年6月7日	56	菓子販賣業	川越市	1,161,890
49	157	原田要吉	文久2年12月4日	63	米穀販賣業	川越市	1,152,650
50	165	岡常吉	文久2年4月12日	63	酒製造並酒類販賣業	川越市	1,098,430
51	188	鈴木徳次郎	明治11年5月8日	47	材木販賣並請負業	川越市	1,011,760
52	5	繁田武平	慶應3年2月16日	58	醬油醸造兼製茶販賣業	入間郡豊岡町	8,205,980
53	19	淺見文藏	明治9年10月20日	49	金銭貸付業	入間郡豊岡町	4,349,080
54	23	平沼彌太郎	明治25年6月12日	33	材木商	入間郡名栗村	3,851,360
55	25	發智庄平	元治元年10月5日	61	農業	入間郡霞ヶ關村	3,642,340

多額納税者議員互選人名簿②

番号	<納税> 額順位	名前	生年月日	年齢	職業	住居	直接国税総額
56	40	平岡徳次郎	慶應2年8月19日	59	雜物買繼商	入間郡元加治村	2,873.180
57	86	柏木代八	明治4年11月7日	54	農業	入間郡名栗村	1,669.660
58	95	松岡龜太郎	嘉永元年8月22日	77	農業	入間郡芳野村	1,595.410
59	107	中村堀太郎	明治11年6月27日	47	綿絲商	入間郡所澤町	1,493.860
60	117	中村芳五郎	安政6年9月13日	66	酒醸造業	入間郡豐岡町	1,440.930
61	131	吉田昭十郎	明治22年3月21日	36	農業	入間郡名栗村	1,287.460
62	151	増田忠順	嘉永2年1月7日	76	農業	入間郡柏原村	1,172.640
63	164	奥貴五平次	文久元年12月21日	64	農業	入間郡南古谷村	1,099.690
比企郡							
64	58	江野常三郎	安政元年10月20日	71	金銭貸付業	比企郡松山町	2,125.940
65	68	土屋平吉	安政5年2月5日	67	煙草元賣捌業	比企郡小川町	1,947.080
66	73	横川重次	明治27年11月9日	31	農業	比企郡大河村	1,869.350
67	77	小林太郎	明治12年2月1日	46	酒類醬油醸造業	比企郡松山町	1,820.570
68	114	利根川覺重郎	慶應3年5月21日	58	農業	比企郡中山村	1,448.660
69	158	利根川惣三	明治9年4月24日	49	酒造業	比企郡野本村	1,149.860
70	185	笠間茂平	明治25年10月23日	33	醬油製造業	比企郡小川町	1,018.550
71	193	鈴木浩一	安政6年12月28日	66	醬油醸造業	比企郡中山村	993.140
秩父郡							
72	1	大森喜右衛門	嘉永6年2月17日	72	絹織物買繼商	秩父郡秩父町	19,049.910
73	2	柿原萬藏	明治24年7月5日	34	絹織物買繼商	秩父郡秩父町	14,934.300
74	59	柿原定吉	明治4年9月2日	54	會社員	秩父郡秩父町	2,110.030
75	74	町田芳治	明治2年7月13日	56	絹糸商	秩父郡秩父町	1,864.560
76	123	久喜文重郎	明治6年11月3日	52	絹絲商	秩父郡秩父町	1,352.460
77	194	關根市次郎	明治9年2月1日	49	絹糸商	秩父郡秩父町	983.160
児玉郡							
78	61	高橋守平	明治27年10月13日	31	農業	児玉郡丹庄村	2,091.690
79	105	大林良作	明治元年10月15日	57	醫業	児玉郡七本木村	1,504.360
80	116	原鐵五郎	元治元年5月24日	61	農業	児玉郡若泉村	1,441.210
81	124	筑紫孫三郎	明治10年1月12日	48	酒類醸造業	児玉郡児玉町	1,337.190
82	135	貫井清憲	明治25年4月28日	33	農業	玉児郡若泉村	1,260.230
83	146	戸谷間四郎	明治9年5月19日	49	物品販賣業	児玉郡本庄町	1,218.730
84	171	原利平	文久2年5月18日	63	農業	児玉郡若泉村	1,079.090
85	174	村山眞作	明治10年11月11日	48	酒類販賣業	児玉郡賀美村	1,050.600
大里郡							
86	20	八木橋本次郎	文久元年2月26日	64	呉服大物商	大里郡熊谷町	4,026.650
87	70	坂田清兵衛	明治12年5月24日	46	煙草元賣捌業	大里郡熊谷町	1,902.740
88	79	大谷藤三郎	嘉永2年2月12日	76	金銭貸付業	大里郡深谷町	1,764.020
89	84	石坂養平	明治18年11月26日	40	農業	大里郡奈良村	1,701.010
90	85	田中長一郎	明治5年1月1日	53	米穀肥料商	大里郡佐谷田村	1,670.640
91	89	松本眞平	明治11年5月12日	47	會社員	大里郡熊谷町	1,621.940
92	90	長島甚助	元治元年8月10日	61	農業	大里郡吉見村	1,615.240
93	102	石坂豊人	元治元年8月14日	61	農業	大里郡奈良村	1,551.850
94	112	長島作左衛門	明治27年4月29日	31	農業	大里郡太田村	1,452.860
95	128	土屋裕治郎	明治3年12月26日	55	呉服商	大里郡深谷町	1,300.950
96	136	青木七郎	元治元年11月16日	61	農業	大里郡樺澤村	1,259.320
97	144	根岸伴七	明治2年11月7日	56	農業	大里郡吉見村	1,221.000
98	152	吉澤文作	明治21年11月23日	37	酒類小賣商	大里郡熊谷町	1,171.840
99	155	中島半平	文久2年6月13日	63	荒物商	大里郡深谷町	1,166.610
100	160	黒田小源治	明治22年3月29日	36	材木商	大里郡熊谷町	1,117.130
101	161	齋藤安雄	慶應元年6月1日	60	銀行重役	大里郡中瀬村	1,105.200
102	172	石坂藤兵衛	明治12年11月17日	46	農業	大里郡奈良村	1,058.340
103	176	須田實郎	明治9年4月22日	49	農業	大里郡妻沼町	1,041.010
104	198	金井幸吉	安政6年9月9日	66	農業	大里郡吉見村	974.250
北埼玉郡							
105	7	橋本喜助	明治22年11月17日	36	足袋製造業	北埼玉郡忍町	7,679.850
106	9	田島竹之助	慶應2年12月16日	59	農業	北埼玉郡太田村	5,904.410
107	12	酒巻敬之助	萬延元年2月19日	65	金銭貸付業	北埼玉郡志多見村	5,420.970
108	28	野本三之助	慶應3年2月19日	58	金銭貸付業	北埼玉郡賀須町	3,322.700
109	29	上雄之助	明治10年10月18日	48	農業	北埼玉郡水深村	3,255.960
110	30	松岡三五郎	慶應3年4月20日	58	銀行員	北埼玉郡星河村	3,115.520

多額納税者議員互選人名簿③

番号	<納税> 額順位	名前	生年月日	年齢	職業	住居	直接国税総額
111	31	清水近太郎	明治元年4月17日	57	會社員	北埼玉郡賀須町	3,102.250
112	33	田口庸三	明治12年3月27日	46	會社員	北埼玉郡村君村	3,057.680
113	35	奥貫實一郎	明治9年12月23日	49	足袋製造業	北埼玉郡忍町	3,021.680
114	39	杉下爲吉	明治5年1月28日	53	呉服商	北埼玉郡羽生町	2,916.550
115	49	石井參四郎	安政6年3月10日	66	農業	北埼玉郡水深村	2,471.160
116	50	本山政一	明治10年4月8日	48	足袋製造業	北埼玉郡忍町	2,450.310
117	51	堀江忠四郎	文久2年7月7日	63	農業	北埼玉郡三俣村	2,420.240
118	52	川島倉藏	元治元年6月28日	61	農業	北埼玉郡大桑村	2,352.270
119	53	古市國太郎	慶應2年2月26日	59	荒物商	北埼玉郡羽生町	2,320.170
120	54	峯才三郎	明治元年12月11日	57	醬油醸造業	北埼玉郡羽生町	2,225.720
121	55	野中廣助	慶應3年3月25日	58	農業	北埼玉郡大越村	2,214.910
122	57	保泉近藏	明治7年9月24日	51	綿糸綿布販賣業	北埼玉郡忍町	2,166.300
123	62	小島完吉	明治4年12月3日	54	足袋製造業	北埼玉郡羽生町	2,040.370
124	63	今泉濱五郎	明治6年10月2日	52	足袋製造業	北埼玉郡忍町	2,020.090
125	64	柴田甫	明治13年3月13日	45	足袋製造業	北埼玉郡忍町	1,980.070
126	65	田村四郎	明治27年2月10日	31	農業	北埼玉郡豊野村	1,974.630
127	67	鈴木勝次郎	文久3年6月22日	62	足袋製造業	北埼玉郡忍町	1,949.180
128	69	齋藤藏之助	明治2年6月28日	56	農業	北埼玉郡成田村	1,945.120
129	72	新井理市	明治19年12月23日	39	農業	北埼玉郡水深村	1,885.810
130	76	石川康之助	明治8年1月31日	50	金銭貸付業	北埼玉郡大越村	1,840.360
131	94	松本弓平	明治9年1月7日	49	金銭貸付業	北埼玉郡屈巢村	1,602.470
132	96	若山静一郎	明治23年8月13日	35	農業	北埼玉郡種足村	1,594.400
133	106	大澤専藏	安政5年3月2日	67	足袋製造業	北埼玉郡忍町	1,500.670
134	111	中山正一	明治8年4月25日	50	農業	北埼玉郡大桑村	1,459.900
135	113	小林賢太郎	明治3年2月16日	55	農業	北埼玉郡元和村	1,449.400
136	132	野本茂基知	明治24年6月3日	34	會社員	北埼玉郡賀須町	1,286.410
137	142	諸貫半之助	明治2年3月16日	56	小麦粉販賣業	北埼玉郡忍町	1,231.530
138	163	時田啓左衛門	慶應3年6月10日	58	足袋製造業	北埼玉郡忍町	1,102.010
139	170	儘田勝次郎	明治15年6月15日	43	綿絲商	北埼玉郡羽生町	1,082.140
140	189	門井東一	明治12年7月8日	46	農業	北埼玉郡大桑村	1,011.340
141	196	大野右一	明治13年4月23日	45	農業	北埼玉郡長野村	978.870
南埼玉郡							
142	14	永田勘六	明治2年7月10日	56	農業	南埼玉郡粕壁町	5,209.620
143	17	田村新藏	安政5年5月26日	67	紙砂糖商	南埼玉郡粕壁町	4,690.390
144	21	大里一太郎	明治23年1月7日	35	農業	南埼玉郡粕壁町	4,005.710
145	22	齋藤善八	慶應2年5月12日	59	呉服商	南埼玉郡岩槻町	3,912.310
146	26	榎本善兵衛	明治11年4月5日	47	農業	南埼玉郡久喜町	3,489.630
147	46	會田善次郎	明治6年4月1日	52	呉服商	南埼玉郡越ヶ谷町	2,634.040
148	48	石井利助	慶應3年4月23日	58	農業	南埼玉郡川柳村	2,529.250
149	71	白鳥喜四郎	明治6年10月14日	52	青物乾物商	南埼玉郡越ヶ谷町	1,886.570
150	88	山崎長右工門	慶應元年2月4日	60	農業	南埼玉郡越ヶ谷町	1,644.980
151	98	田口菊太郎	明治11年10月9日	47	農業	南埼玉郡新和村	1,581.540
152	100	井出門平	明治27年7月20日	31	農業	南埼玉郡出羽村	1,574.600
153	101	田中四一郎	明治2年10月10日	56	農業	南埼玉郡潮止村	1,568.110
154	103	小泉市右工門	明治23年9月15日	35	呉服商	南埼玉郡越ヶ谷町	1,535.930
155	110	太田滝右工門	安政4年7月3日	68	農業	南埼玉郡八條村	1,462.050
156	118	小島良平	明治23年8月17日	35	農業	南埼玉郡百間村	1,433.590
157	119	大野伊右衛門	明治19年6月20日	39	材木商	南埼玉郡出羽村	1,404.950
158	120	野口源次郎	明治2年1月18日	56	農業	南埼玉郡出羽村	1,399.440
159	126	武井昇	明治18年12月9日	40	農業	南埼玉郡江面村	1,323.860
160	129	齋藤益太郎	安政5年2月10日	67	農業	南埼玉郡大相模村	1,300.630
161	130	中村貞次郎	安政5年12月2日	67	農業	南埼玉郡出羽村	1,289.410
162	133	細沼慎介	明治15年12月10日	43	農業	南埼玉郡大袋村	1,285.340
163	137	高橋慶助	安政3年1月15日	69	農業	南埼玉郡出羽村	1,248.880
164	138	日下部義人	明治23年9月30日	35	農業	南埼玉郡須賀村	1,248.310
165	139	齋藤八右工門	明治元年7月28日	57	酒類販賣業	南埼玉郡粕壁町	1,246.640

多額納税者議員互選人名簿④

番号	<納税> 額順位	名前	生年月日	年齢	職業	住居	直接国税総額
166	140	田村市太郎	明治6年12月22日	52	農業	南埼玉郡粕壁町	1,241.860
167	162	菊地又三郎	明治2年5月7日	56	醤油醸造業	南埼玉郡河合村	1,102.610
168	166	高塚徳次郎	明治9年3月24日	49	農業	南埼玉郡太田村	1,090.350
169	169	齋藤信之助	慶應2年8月7日	59	農業	南埼玉郡三箇村	1,082.640
170	177	山田半六	文久元年10月22日	64	荒物商	南埼玉郡粕壁町	1,038.930
171	180	大熊新平	明治11年5月24日	47	農業	南埼玉郡菖蒲町	1,025.400
172	186	太田益太郎	明治13年12月20日	45	農業	南埼玉郡八條村	1,017.440
173	187	仁科仁兵衛	明治9年4月26日	49	農業	南埼玉郡越ヶ谷町	1,014.710
174	192	下村喜兵衛	明治2年10月29日	56	郵便局長	南埼玉郡岩槻町	999.510
175	197	平澤三郎	明治5年11月15日	53	農業	南埼玉郡菖蒲町	977.020
北葛飾郡							
176	10	田中源太郎	明治25年6月17日	33	酒醸造業	北葛飾郡幸松村	5,602.150
177	11	金澤理三郎	明治12年4月4日	46	農業	北葛飾郡吉田村	5,595.980
178	16	新井信太郎	明治26年5月6日	32	農業	北葛飾郡八代村	4,702.240
179	27	白石昌字	文久2年12月27日	63	農業	北葛飾郡櫻田村	3,455.780
180	32	石川仁平治	明治25年3月22日	33	醤油醸造業	北葛飾郡松伏領村	3,066.420
181	34	渡邊勘左衛門	慶應3年8月3日	58	銀行員	北葛飾郡杉戸町	3,036.620
182	36	野口秀	明治20年7月27日	38	農業	北葛飾郡高野村	2,978.420
183	41	石川欣一郎	明治2年1月16日	56	農業	北葛飾郡松伏領村	2,811.900
184	43	渡邊湜	慶應2年1月1日	59	農業	北葛飾郡櫻田村	2,739.260
185	66	奈良榮治郎	明治11年9月10日	47	農業	北葛飾郡櫻田村	1,966.300
186	82	關口豊	明治15年11月19日	43	農業	北葛飾郡櫻井村	1,729.780
187	91	秋間礼佐	慶應2年11月5日	59	農業	北葛飾郡幸手町	1,610.510
188	97	遠藤卓治	明治19年10月3日	39	農業	北葛飾郡行幸村	1,588.070
189	121	知久貞三郎	明治3年10月10日	55	農業	北葛飾郡八代村	1,383.200
190	125	堀切伊平治	明治14年7月9日	44	醤油醸造業	北葛飾郡彦成村	1,335.400
191	127	田中彦右工門	明治7年10月25日	51	農業	北葛飾郡田宮村	1,312.390
192	145	濱田久治	明治8年11月7日	50	農業	北葛飾郡堤郷村	1,219.080
193	147	野村悦太郎	嘉永2年4月22日	76	農業	北葛飾郡櫻田村	1,208.980
194	148	關口武二郎	萬延元年11月24日	65	農業	北葛飾郡櫻井村	1,203.510
195	149	齋藤岩次郎	明治11年11月13日	47	農業	北葛飾郡早稲田村	1,197.880
196	159	柿沼信夫	明治10年12月9日	48	農業	北葛飾郡静村	1,143.330
197	175	内田直次郎	明治元年12月9日	57	煙草元賣捌業	北葛飾郡幸手町	1,045.640
198	178	江森角三郎	慶應3年4月8日	58	農業	北葛飾郡上高野村	1,028.780
199	195	橋本久次郎	明治21年9月27日	37	材木商	北葛飾郡栗橋町	982.960
200	200	遠藤柳作	明治19年3月18日	39	官吏	北葛飾郡行幸村	1,156.570

注

- 1) この貴族院改革の政治過程については拙稿「大正14年の貴族院改革」(愛知淑徳大学大学院現代社会研究科編・刊『現代社会研究科研究報告』第7号、2010年、所載)を参照されたい。
- 2) 藤田義相編「兵庫県における貴族院議員の互選」、1966年、武庫史纂会刊(国会図書館所蔵マイクロフィッシュ)
- 3) このような選挙人名簿が北海道や他府県の憲政会支部や政友会支部によって作成され、選挙運動に使用されたかどうかは不明である。少なくとも2012年11月現在、筆者にとって、そのような名簿は未見である。
- 4) 1925年8月2日付『東京日日新聞』埼玉版。
- 5) 納税金額や県内および郡内における順位等は巻末に付した「埼玉県多額納税者名簿」に依った。以下、煩を避けてその都度断らない。
- 6) 1925年8月2日付『東京日日新聞』埼玉版。
- 7) 同上。
- 8) 同上。
- 9) 『新編埼玉県史・通史編5』(埼玉県刊、1988年)第2章2「埼玉県の自由党と改進黨」342～353ページを参照。
- 10) 同、610ページ。
- 11) 1925年8月5日付『東京日日新聞』埼玉版、引用した記事中の括弧は筆者による。
- 12) 1918(大正7)年5月17日付『東京朝日新聞』。
- 13) 同上。
- 14) 「埼玉県下の政党政派の概況 大正八年八月」(『新編埼玉県史・資料編19』、1983年、864～865ページ、所収)。
- 15) 前掲『新編埼玉県史・通史編5』、613ページ。
- 16) 朝日新聞通信部編『県政物語』、世界社、1928年)71ページ。
- 17) この点に関して、前掲『新編埼玉県史・通史編5』、1988年、833ページを参照。
- 18) 「埼玉県議会歴代議員録」(埼玉県議会編・刊『埼玉県議会史』第6巻、1966年、別刷)173ページを参照。
- 19) 同上。
- 20) 細井肇『政争と党弊』(益進会、1914年)232ページ。
- 21) 1925年8月7日付『東京日日新聞』埼玉版。
- 22) 同上。
- 23) 1925年8月14日付『東京日日新聞』埼玉版。
- 24) なお、田中は翌年の半数改選で県議員に当選し、さらに1932(昭和7年)の総改選で貴族院議員となった。
- 25) 『原敬日記』(1960年)大正7年6月4日の条。なお、この点について拙著『大正デモクラシーの時代と貴族院』(成文堂、2005年)の160～162ページを参照されたい。
- 26) 1925年8月8日付『東京日日新聞』埼玉版。
- 27) 前掲『県政物語』、72ページ。
- 28) 1925年8月14日付『東京日日新聞』埼玉版。
- 29) 同上。
- 30) 1925年8月15日付『東京日日新聞』埼玉版。
- 31) 前掲「埼玉県議会歴代議員録」146ページ。
- 32) 1925年8月15日付『東京日日新聞』埼玉版。
- 33) 1925年8月19日付『東京日日新聞』埼玉版。
- 34) 1925年8月23日付『東京日日新聞』埼玉版。
- 35) 同上。
- 36) 1925年8月25日付『東京日日新聞』埼玉版。
- 37) 同上。
- 38) 1925年9月8日付『東京日日新聞』埼玉版。
- 39) 1925年9月5日付『東京日日新聞』埼玉版。
- 40) 1925年9月8日付『東京日日新聞』埼玉版。
- 41) 1925年9月11日付『東京日日新聞』埼玉版。
- 42) 1925年9月10日付『東京日日新聞』静岡版。
- 43) 1925年9月11日付『東京日日新聞』埼玉版。
- 44) 同上。
- 45) 伊藤隆編『斉藤隆夫日記』上、(中央公論社、2009年)大正14年9月7日の条
- 46) 同、大正14年9月9日の条。
- 47) 同、大正14年9月10日の条。

※本稿は愛知淑徳大学平成24年度研究助成による研究の一部である。また、図表等のデータ入力に本研究科研究生朝井佐智子、同伊藤真希の両氏のご協力を得た。共に記して謝意を表したい。